南のひと 43

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。

竹富島出身の狩俣正三郎（かりまたせいざぶろう）さんは、その人間味溢れる人柄から島民に一目置かれる存在だ。

正三郎さんは、農業の傍ら竹富町議会議員を務め、竹富公民館長を兼務した。また、観光業に頼らない養蚕業を再開するべく養蚕組合を組織し、その後、竹富町農業協同組合の組合長などを務めながら保護司となり、八重山保護司会会長を務めた。

これらの人生の歩みを見るだけでも、正三郎さんは、島民にとって頼れる存在であり、威厳のある人物であることが見てとれる。ひょんな事から島人と昔話しをすれば、正三郎さんの名前と共に、その時々の苦労話と武勇伝が語られ、「あの時は助かった」とか「あの人のおかげだね」というような言葉をよく耳にする。

同じ集落に暮らしていた事もあり、小さかった娘の手をひいて正三郎さんの家の前を通れば、「シュブイ（冬瓜）を持っていきなさい。ほうれん草が採れたからもらっていきなさい」と声をかけてくれた。正三郎さんとハツさん夫妻の家は、庭も家庭菜園も、ため息がでるほど綺麗に整えられていて、いつ訪れても清らかな気を肌で感じた。

今では集落の集まりには参加されなくなった正三郎さんだが、アイジシン（上布で仕立てた着物）に身を包み、ただ座って居るだけなのに、その場の空気が引き締まるような、そんな存在感を放つ。

正三郎さんの息子さんで大学名誉教授の恵一（けいいち）さんに、恵一さんから見た正三郎さんはどんな人ですかと聞いてみた。

「私が中学生の頃、学校から帰って畑に行かず勉強をしたら、その夜『勉強は学校でするもんだ』と叱られたことがある。勉強せよと言われたことは一度もなかった。その後の父の言動からも、社会人としての人間力を育むことを重視する人であると思っている」

社会と常に向き合い、どうすればより良い島になるのか問い続けてきた正三郎さん。その生きざまから見えてくる人間像は、「嘘」が蔓延するこの時代だからこそ、今を生きる全ての世代に胸を張って生きることへの希望と勇気を与えてくれる。

水野暁子　みずのあきこ
1973 年千葉県に生まれる。1986 年に家族とアメリカへ渡る。1996 年 School of Visual Arts（New York）を卒業。1999 年に竹富島に移住。
現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。

Akiko Mizuno Photography　八重山ライブラリー